

【日時】

令和5年10月27日(金)15:00~17:00

【場所】

新館1階 会議室

【参加者】

<学校協議委員>

井坂 行男 (大阪教育大学教育学部 総合教育系特別支援教育部門 教授)

伊藤 弘一郎(南大江東連合新興町会 会長)

前田 浩 (大阪ろう難聴就労支援センター 理事長)

良原 恵子 (大阪府立スクールカウンセラー スーパーバイザー)

尾中 友哉 (NPO 法人 SilentVoice 代表)

佐藤 てるみ(PTA 会長)

1. 開会

2. 学校長挨拶

3. 各分掌からの活動報告

4. 議事

・令和5年度学校経営計画 中間報告 学校長より説明

<委員からの主な意見・質問及び回答>

① 安全安心な学校づくりについて

・いじめ問題についてよく理解して実行している。アンケートを担当が見て、何かあれば聞き取りという流れである。いじめ対策委員会は専用の議事録と次第を残した方がよい。

本校の児童生徒が、下校時のトラブルや他の学校とトラブルがあった場合も本校のいじめ対策委員会で扱う。

・後半に向けて、成果や課題の説明がほしい。

→学校安全について、防災については今年度も進めている。子供たち自ら自分たちを守り、また周りの人を守れるように活動を進めている。体験を大事にしたいので、煙中体験、被震体験を行っている。

・防災等はどこの学校もしないといけませんが、ここは聴覚支援なので、その専門性を考える必要がある。一人ひとりにあった避難の方法を工夫することも大事。

② 子どもたちの学ぶ力の育成とキャリア教育

・GIGAスクールやICTを学ぶことも大切だが、授業のベーシックなスキル、例えば板書の方法、色の使い方授業をまとめた黒板、教員の質問方法や子どもの意見の引き出し方、という部分がぼやけてきているように思う。授業に対するベーシックなスキルの研修も特に若い教員に必要。

・ICTについては、無しには進められない。情報モラル、倫理の問題が大きくなってきている。親の知らないところで問題が出てきている。幼稚部からモラルについての学習を積み重ねていくのがよいと感じる。

→モラルについては担当が伝えている。また外部機関を活用し情報モラルの研修も行っている。問題が起きる前、使い始める前に研修を行っている。我々が思うより、子どもたちのほうが進んだ使い方をしているので、具体駅なことを毎年繰り返し取り組んでいる。

・わかる授業の基礎学力の推進について具体的に教えてほしい。

→板書の整理等については意識が向いていなかった。手話でわからないときは必要な情報を検索することを念頭にわかる授業というのを考えている。

- ・後で文字として残すなど、痕跡型の言語形態、情報提供手段は大事。
- ・図書館に行って本を読む機会は地域の学校も少なくなっている。本を読みたいと心の底から思うモチベーションが下がっている。そのような社会になってきている。たとえば40～50代の先生は本を読んでいた。昔は本に手が伸びていた、他に選択肢がないので図書館に通って感想文を書いて添削してもらった。それがうれしかった。手で書くということも大事かと思う。そのあたり現場の先生が大事だと感じているか。リテラシーの問題だけでなく、聾難聴の児童生徒の特性も勉強してもらいたい。

### ③ 教員の専門性の向上

- ・さくら連絡網を PTA 総会で承認されて実施。数か月にわたっての話し合い。有料であるためどこまで有効なのかという話し合いを重ねた。遠方からきている方もいるので、災害時に連絡のできるさくら連絡網も有効性を感じる。PTA からの手紙を印刷するために学校に来なくてよいなど、PTA の保護者の意見もあり、効果がでている。
- ・自立活動プログラムや観点別の評価は重要なので、みなさんで協力的に進め効果的な活動を進めてほしい。ジャムボードは言葉的な表現もできるので、書きことばや論理性など子どもたちのリテラシーの向上にもつながる。今後、効果や気づいたことを報告してほしい。全日聾研でジャムボードの活用や児童の自己評価に活用しているなど効果的な実践の報告もあった。
- ・昨年度の議論から、ICT の実践現場への導入がさらに広がっていると感じている。紙ベースやリテラシーについて、子どもたちの反応や活用状況がわかれば、今後の議論につながると思う。
- ・全日聾の報告でも、在籍数の減少から他県の学校との交流に使用し、ICT 活用の幅が広がっている。
- ・オンライン会議システムを使った交流で、自分の顔が出てくるので、自分の話し方について自己確認ができる。また地域が離れた同世代との仲間との交流で、所属意識やコミュニティの意識が生まれ、自己肯定感の高まりも得られるメリットがある。

### ④ センターの機能充実と開かれた学校について

- ・中央の高等部の生徒が減っているのか、といろんなところで聞かれる。ありえない数字になっている。どのようにして戻していくか、戦略的なものがあると思うが。どこの学校も減ってきていろんな対策をしている学校もある。危機感をもって戦略を考えてほしい。
- 昨年度より危機感をもって進めている。がなかなか先に進めていない。人工内耳の児童生徒が増えている中で、学校として意識して具体的な動きとしては、中学校訪問、高校へのアンケートなどを行っているが、遅いと言われれば仕方がない。

## 5. 事務局より

## 6. 閉会